

# 如雲社の出発点

——京狩野家資料を手掛かりにして——

五十嵐公一

## はじめに

如雲社は幕末から明治時代にかけて京都の画家たちが作っていた、月並会を活動の基本としていた団体である。特に明治期の京都画壇で重要な役割を果たし、この如雲社から多くの画家が育っていった。例えば、昭和23年に女性初の文化勲章受賞者となった上村松園はその一人である。

その如雲社については美術記者・村上文芽が「日出新聞」に連載した複数の記事<sup>1</sup>、美術雑誌「塔影」の編集顧問だった神崎憲一による『京都に於ける日本画史』（京都精版印刷社、1929年）や『京都画壇散策 ある美術記者の交友録』（京都新聞社、1994年）などから活動の断片が分かる。また、現在までに若干の研究の蓄積もある。そこで、それらを踏まえ、この如雲社について今までに何が分かっているのかについて拙稿「第三回京都博覧会での如雲社」で簡単に述べた<sup>2</sup>。

ところが、そこで全く触れなかったことがある。それは如雲社の結成に関する事情である。後述するが、これに関しては複数の記録があり、それらが互いに齟齬を来している。そのため、結成の事情が分からず、結成時期も確定できていないからだった。これは如雲社を理解するために、どうしても解決しておかねばならない問題だと思われる。

そこで、本論では先ず如雲社の具体的な活動が分かる新たな史料を提示する。そして、そこから明らかとなる事実も踏まえ、今まで見過ごされてきた一つの史料に注目し、如雲社の結成の事情を明らかにしたいと思う。

## 明治6年と明治7年の如雲社

如雲社の比較的早い時期の活動として、明治6年（1873）の第2回京都博覧会に参加したという事実が以前から知られている<sup>3</sup>。この第2回京都博覧会は、明治6年3月13日から6月10日までの90日間、京都御所を会場として開催されたものだった。そこで如雲社は絹や紙あるいは陶工が作った素焼の器皿に、求めに応じて墨戯を揮う書画揮毫を行っていて、これに関わった如雲社の画家たちは次の50名だったことが分かっている。

土佐光文、鶴澤探真、原在泉、中島有章、中島華陽、  
島田雅喬、岸竹堂、前川文嶺、吉坂鷹峰、加納黄文、  
岡島清曠、島津松雪、山本探齋、狩野永祥、森寛齋、  
望月玉泉、國井應文、長野祐親、村瀬玉田、岸雀堂、  
菱田日東、林耕雲、八木雲溪、森竹友、大橋海石、  
猪野文信、塩川文麟、塩川文鳳、幸野梅嶺、羽田月洲、  
山田文厚、鈴木瑞彦、野村文挙、大橋文岱、前田半田、  
中西耕石、浅井柳塘、上野雪岳、鈴木百年、鈴木百僊、  
鈴木百翠、桜井百嶺、今尾景年、伊澤九臯、久保田米僊、  
大藪竹僊、大藪虎堂、田中正堂、山本松堂、平井久僊

ここには安政2年（1855）の禁裏御所障壁画制作に参加した土佐光文、鶴澤探真、狩野永祥を始めとする画家たち、そしてこの明治6年以降に京都画壇の重鎮となってゆく塩川文麟、森寛齋などの画家たちが含まれている。つまり、新旧の画家たちが顔を揃えている訳である。

また、その翌年の明治7年、やはり京都御所を会場として第3回京都博覧会が開催された。会期は3月1日から6月8日までの100日間。ここでも如雲社は書画揮毫を行っていて、その詳細が「如雲社諸先生名録」(京都工芸繊維大学附属図書)という史料から分かる。これは「大博覧会ニ付規則定」「当社元規則」「三月一日会場出席名録」「日割」から成るもので、第3回京都博覧会での如雲社の活動、如雲社の内規などの詳細を教えてくれる史料である。これは未紹介史料だったので拙稿「第三回京都博覧会での如雲社」で全文を翻刻し、ここから何が分かるのかについても簡単に触れた<sup>4</sup>。その第3回京都博覧会に参加した如雲社の画家は次の32名だった。

土佐光文、狩野永祥、鶴沢守保、鶴沢探岳、長野祐親、本部有数、林耕雲、加納黄文、岸恭、原在泉、徳見友仙、梅戸在勤、森寛斎、森竹友、竹川友広、寫田雅喬、村瀬玉田、前川文嶺、望月玉泉、内海玉湖、岡嶋(清曠)、中嶋華陽、八木雲淡、岸竹堂、岸九岳、鈴木百年、今尾景年、久保田米仙、桜井百嶺、田中正堂、中寫有章、国井応文

当然ながら、第2回京都博覧会に関わった50名と重なる画家が多い。

こうして明治6年と明治7年の京都博覧会で、如雲社がどのような活動を行ったのが少し明らかになってきたのだが、この時期の如雲社の活動が最近新たにもう一つ確認できた。明治6年6月1日、京都の円山正阿弥楼で開催された「徹山翁三三回忌追善書画会」である。実は、明治6年に徹山翁三三回忌追善書画会が行われたことは、以前から知られてはいた<sup>5</sup>。ところが、それに如雲社が関与していたことまでは分かっていなかったのである。

この関与は、山口県立美術館に「今書画及遺墨展観」(図1)として登録されている史料から分かる。史料編で全文翻刻したものがそれである。この史料は「案文」「名簿」「引き札」の3つの部分から成っている。そのうち「案文」と「名簿」は一人が書いたことが筆跡から分かり、それに「引き札」が貼付されたのが「今書画及遺墨展観」である。どうやら、この「案文」の書状が、「名簿」の人物たち一人ずつに送られた。その際に書状と一緒に送られたのが「引き札」だったようだ。「今書画及遺墨展観」は活動記録の保存のために、後に整理さ

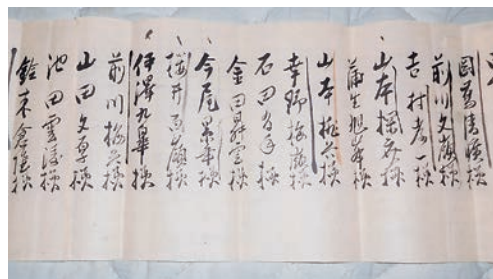
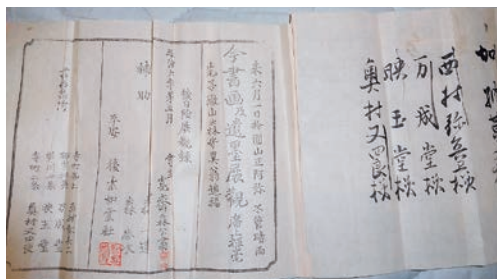
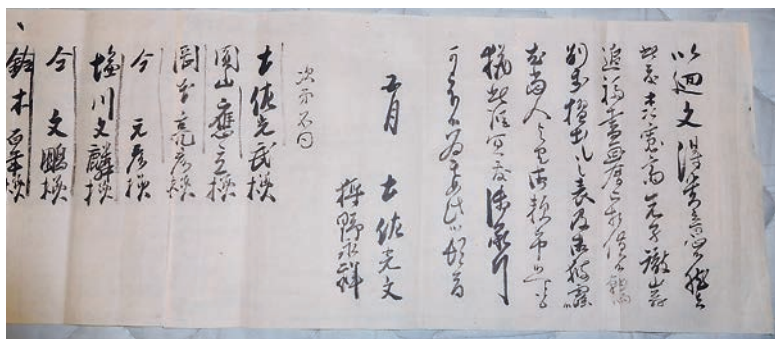


図1 今書画及遺墨展観(山口県立美術館)



図2 寛齋森公肅(森寛齋:1814~94)

れた史料だと思われる。

いま、その「引き札」で告知されているのは次のような内容である。明治6年5月、「寛齋森公肅(森寛齋:1814~94)」(図2)が、6月1日に圓山正阿弥で席上揮毫を伴う今書画及遺墨展観を開催する。この今書画及遺墨展観の目的は「徹山森守真(森徹山:1775~1841)」の追福だった。そして、それを補助したのは「森一道」「森忠次」そして「平安 後素如雲社」。つまり、如雲社は森寛齋が会主を務める今書画及遺墨展観を補助する役割を果たした訳である。このことを裏付けるかのように、「引き札」には如雲社の公印と思われる「如雲社」(朱文方印)も「平安 後素如雲社」の文字の下に捺されている。

森徹山が亡くなったのは天保12年(1841)5月である。従って、この今書画及遺墨展観は確かに徹山翁三三回忌追善書画会ということになる。

## 明治6年の徹山翁三三回忌追善書画会

この森徹山は、森周峰(1738~1823)の子として大坂で生まれた<sup>6</sup>。徹山の父・周峰も画家だったが、徹山は猿を巧みに描いて知られた叔父・森狙仙(1747~1821)の養子となった。それは16歳以前のことだったと見られている。その狙仙の勸

めにより徹山は円山応挙(1733~95)に学ぶ。21歳の寛政7年(1795)には、応挙一門の絵師として兵庫県美方郡香美町・大乘寺の障壁画の一部を描いているから、この時までには十分な画力を備えた画家となっていたようだ。

その徹山の婿養子となったのが森一鳳(1798~1871)。そして、養子となったのが森寛齋である。一鳳は多くの「藻刈舟図」を描いて知られた画家。一鳳が描く藻刈舟は「儲かる一方」に通じるとして、特に大坂の商人の間で好まれた。しかし、一鳳は明治4年(1871)に亡くなる。そのような事情もあり、この明治6年に寛齋が徹山翁三三回忌追善書画会の会主を務めることになったようだ。

徹山翁三三回忌追善書画会が行われたのは、明治6年6月1日である。先に見たように、如雲社が関わった第2回京都博覧会の開催期間は明治6年3月13日から6月10日までだったから、その開催中に徹山翁三三回忌追善書画会が行われたことになる。

また、この「引き札」と一緒に届けられた書状は、土佐光文(1812~79)と狩野永祥(1810~86)が連名で徹山翁三三回忌追善書画会に協力するよう求めたものだったことが「案文」から分かる。この明治6年の時点で光文は62歳、永祥は64歳。そして寛齋は60歳だった。年齢、そして当時の京都画壇における地位という点で、光文と永祥は寛齋が徹山翁三三回忌追善書画会への協力を関係者に依頼するのに相応しい人物だったと思われる。そして、その二人の連名による書状が「名簿」に記される人物たちに送られたのである。掲載順に名前を列举すると、次のようになる。

土佐光武、圓山應立、岡本亮彦、岡本元彦、塩川文麟、塩川文鵬、鈴木百年、鈴木百仙、中嶋有章、望月玉泉、国井應文、原在泉、星野蟬水、岸竹堂、岸九岳、嶋田雅壽、八木奇峯、八木雲溪、村瀬双石、村瀬玉田、中嶋華陽、岸恭、大橋海石、徳美友仙、岸大路岸禮、長野祐親、菱田日東、大橋文岱、吉坂鷹峰、田中友美、岡嶋清曠、前川文嶺、吉村孝一、山本探斎、蒲生旭峯、山本桃谷、幸野梅嶺、石田有年、金田昇雲、今尾景年、桜井百嶺、

伊澤九臯、前川梅谷、山田文厚、池田雲樵、鈴木倉□、  
青竜山、林耕雲、嶋津松雪、宮城晴洲、泉文寵、木村梁舟、  
本部有数、加納黃文、

この全てが徹山翁三三回忌追善書画会に参加した如雲社の画家だったとは断言できない。また、この中には現在では素性が分からなくなった者も含まれている。しかし、彼らが如雲社と関係が深かったことは間違いない。これは如雲社の一史料となるはずである。

また、この「名簿」の最後の部分には、一人分の名前が空けられ、西村弥兵衛、万成堂、映玉堂、奥村又四良の名が記されている。この四人にも書状が送られたことが分かるのだが、彼らは「引き札」の中で「書画集所」として指定されている「寺町仏上 西村弥兵衛」「押小ジ柳馬バ 万成堂」「堀川四条 映玉堂」「寺町二条 奥村又四良」のことである。このうち奥村又四良は絵具商、万成堂は表具師だったことが分かっている<sup>7</sup>。従って、彼らは恐らく画家ではないのだが、如雲社の活動を支えた人物たちだったようだ。ちなみに、このうちの万成堂は拙稿「第三回京都博覧会での如雲社」で紹介した「如雲社諸先生名録」（京都工芸繊維大学附属図書）の中の「三月一日会場出席名録」に如雲社の「幹事」としても登場している<sup>8</sup>。こうして明治6年6月1日、徹山翁三三回忌追善書画会は森寛齋が会主、如雲社がそれを補助する形で開催された訳である。

## 森寛齋と如雲社

では、この徹山翁三三回忌追善書画会の会主を務めた森寛齋はどのような人物だったのだろうか。もともと寛齋は長州生まれだったこともあり、幕末には品川弥二郎など長州藩士と深く関わったことが知られている。国事にも奔走しているが、御一新以降は京都での作画活動に集中したようだ。実際、明治6年と明治7年の京都博覧会にも参加しており、如雲社の画家として積極的に活動している。そして、塩川文麟(1808

～77) が亡くなった明治10年以降は如雲社の中心人物として世話役を務めた<sup>9</sup>。

明治10年以降、如雲社において寛齋が果たした役割は大きかった。このことは複数の史料から分かる。明治18年、明治19年、明治21年、明治23年、明治24年の『森寛齋日記』が翻刻されているが、ここに如雲社のことが頻繁に出てくる<sup>10</sup>。また、山口県立美術館には明治14年、明治15年、明治17年、明治18年の「如雲社月並画控」があり、これらから如雲社での寛齋の具体的な活動が確認できる。

このように寛齋と如雲社の関係は深かった。ところが、寛齋がいつから如雲社に深く関わるようになったのかがよく分かっていない<sup>11</sup>。「森寛齋翁言行一斑」（『京都美術協会雑誌』15、1893年）という記事には、寛齋について「元治元年十一月京都画家ノ衰頹センコトヲ憂ヒ、土佐光文、鶴澤探真等ト相謀リ、如雲社ヲ組織シ、生年ヲ奨励シテ、画道ヲ研究セシメ、以テ其振興回復ヲ期シ」とあり、元治元年(1864)11月に寛齋が土佐光文や鶴澤探真らと如雲社を結成したとある。また、寛齋らが如雲社を創設したのは明治維新後だとする『森寛齋先生小伝』（1936年）のような記録もある。いずれも寛齋が如雲社の結成に関わったとするのだが、これらは寛齋を顕彰する目的で書かれたものであり、鵜呑みにすることはできない。また、先述したように寛齋は幕末に国事に奔走している。そのような時期に如雲社の結成にも関わっていたとも思えない。

そこで寛齋と如雲社の関係を探るためにも、如雲社の結成時期について明らかにしておく必要がある。

## 如雲社の結成時期

京都府立総合史料館に「後素協会沿革一件史料」（館古297）と称する史料群がある。これは「後素如雲社々則」「委員会議事録」「名誉・特別賛成員名簿」「後素協会沿革」『後素協会の三十年』の5点から成るものである。その中の「後素協会沿革」は明治28年(1895)に記されたものだが、そこに後素協会は慶応2年(1866)に「土佐光文、鶴澤探真、狩野



永祥、原在照、吉村孝一、国井応文および当時諸先輩」が創設し、明治元年(1868)に「後素如雲社」と命名された団体が母体だとある。

ここに出てくる土佐光文、鶴澤探真、狩野永祥らは安政2年(1855)の安政度禁裏御所障壁画制作で重要な役割を果たした画家たちである。つまり、幕末の京都画壇で中心的な役割を果たした画家たちでもあるのだが、彼らが慶応2年に創設した結社が後素如雲社であり、それが後素協会の前身だと「後素協会沿革」に記されているのである<sup>12</sup>。後素如雲社、つまり如雲社の結成は慶応2年だというのである。

ただ、この「後素協会沿革」は慶応2年から30年程後の記録である。そして、結成時期に関しては、先に見た「森寛斎翁言行一斑」や『森寛斎先生小伝』の内容とも齟齬がある。そのため、この記録も鵜呑みにするのは危険である。

では、如雲社はいつ結成されたのだろうか。いま見てきたように、この点に関して情報は混乱しているのだが、この問題を解決できる確かな記録があるのだろうか。このように考えた時、一つ注目したいことがある。その結成に関わったとされる画家たちの動向である。土佐光文、鶴澤探真(1834～93)、狩野永祥、原在照(1813～71)、吉村孝一(1818～74)、国井応文(1833～87)が如雲社の結成に関わったと「後素協会沿革」にある。そうであるなら、彼らが残した日記類に注目することで何か分からないだろうか。

このように考えた時、一つの記録が浮上してくる。京狩野家に伝わった史料群「京狩野家資料」である<sup>13</sup>。これは京狩野家に関する重要な情報を教えてくれる史料群だが、ここに狩野永祥の記録がある。永祥は幕末から御一新にかけて活躍した画家。先に見たように、明治6年の徹山翁三三回忌追善書画会への協力を土佐光文とともに呼びかけた画家でもある。如雲社の活動に深く関わったことは間違いない。

その「京狩野家資料」に含まれる記録の中に、永祥が当主だった時期の日記『日記(二)(慶応四年四月十九日～明治元年九月十九日)』がある。そして、その慶応4年6月6日条に「月並画集会治定、例月廿五日ニ相定候事」という一条がある。月並画集会を行うことが決まった。開催日は毎月25日に定め

たというのである。これは永祥に関する多くの記録の中で、月並会に触れた最初の記録である。

更に、その内容に従うように、同年6月25日条に「月並会初て催之、鶴沢・海北・佐井田・薩州御絵師 樋口探月・長野父子・木村梁舟・永祥・永震・祥益・祥聳等也」とある。鶴沢探真、海北友樵などが最初の月並会に参加したのである。そして、それ以降、毎月25日に月並会が欠かさず開かれたことも分かる。7月25日条に「月並画会催、鶴沢・木村・樋口父子 群客 海北・長野父子 永祥・永震・祥益等也」、8月25日条には「例之月並会催、鶴沢探真 海 友樵 才田 狩野内匠大兒子息 樋口探月 樋口千代保 木村梁舟 長野図書 近藤清記 粕谷彦三郎 沢田吉之進 永玉堂」とある。

また、『日記(二)(慶応四年四月十九日～明治元年九月十九日)』を継ぐ『日記(三)(明治元年九月廿九日～十二月十三日)』でも、同年9月25日条に「月並会催、群客 鶴沢探真 同舎中義太郎 海北夕樵 同孟千代 永玉堂 近松 樋口父子 大坂佐介 祥益 祥聳」とあり、それ以降も毎月25日に月並会が欠かさず行われたことが分かる

いま、これらの記録から分かるのは、狩野永祥らが参加した月並会が慶応4年6月から始まったということである。先に見たように「後素協会沿革」では永祥らが如雲社の結成に関わったとされていた。ということは、この慶応4年6月から始まった月並会こそが、如雲社の活動の出発点だったのではないだろうか。

「後素協会沿革」には、如雲社の結成は慶応2年だとあった。あるいは、この慶応2年に月並会開催の話が持ち上がっていたのかもしれない。しかし、最初の月並会が行われたのが慶応4年6月だったことは間違いないようだ。この慶応4年6月は、王政復古の大号令から約半年後である。そういう時期に如雲社は産声を上げた可能性が高いということになる。

実は、ここで注目した『日記(二)(慶応四年四月十九日～明治元年九月十九日)』の慶応4年6月6日条及び6月25日条は、幕末の京都の画家たちの相互交流の事例として以前から研究者の興味を引いてきた記録だったのだが<sup>14</sup>、それこそが如雲社の出発点だったと考えたいのである。そして、このことが

認められるのであれば、森寛齋が如雲社の結成に関わったという話は怪しくなってくる。ここに寛齋の名が出てこないし、この時期に狩野永祥は寛齋と深く関わってもいないからである。更に史料を集める必要があるが、寛齋は如雲社の結成には関わっていないと考えるのが妥当なようだ。

今後も如雲社の結成時、そしてそれ以降の活動経緯について新たな史料が出てくるだろうが、その場合でも狩野永祥の先の記録は無視できないはずである。

## おわりに

いま、『日記(二)(慶応四年四月十九日～明治元年九月十九日)』の慶応4年(1868)6月6日条及び6月25日条に注目し、如雲社の結成について考えた。如雲社の結成は慶応4年6月である可能性が高いとの結論に至った。

これで先ずは一つ問題が解決した。ところが、いま注目した『日記(二)(慶応四年四月十九日～明治元年九月十九日)』の慶応4年(1868)6月25日条、及びそれ以降の如雲社の月並会の記録に、気になる人物が出てくる。樋口探月(1819～?)である。というのは、探月は実に不思議な動きをしている人物だからである。ここから新たな問題が派生する可能性があるため、最後に少しだけ触れておきたい。

現在、樋口探月(守保)に関する最も多くの情報を提供してくれるのは、岩切信一郎「樋口探月齋守保という画家—依田学海、八田知紀、五姓田芳柳、黒田清輝等との関係をめぐって—」だと思われる<sup>15</sup>。そこで引用される井上良吉『薩藩画人伝備考』によれば、樋口探月は文政2年(1819)2月25日、薩摩に生まれた。狩野探淵に学び<sup>16</sup>、上総、上野、相模等を遊歴。明治元年(1868)に宮内省のため屏風を制作。明治3年には神祇官に出仕し、明治4年に神祇少録を拜命し「大嘗祭図屏風」を描いた<sup>17</sup>。明治13年には維新以前の旧儀式の調査を命ぜられ、明治15年の内国絵画共進会で褒状を授けられたという。「大嘗祭図屏風」を描くなど、見逃せない仕事をしているのである。

ところが、探月の活動はそれだけに止まらない。森鷗外に漢文を指導した依田学海(1834～1909)、薩摩歌壇の重鎮だった八田知紀(1799～1873)と交流があった。更に、興味深いことに幕末から明治初めにかけて活躍した洋画家・五姓田芳柳(1827～92)が10代の頃に探月から画を学んだという記録がある<sup>18</sup>。加えて、近代日本洋画界に大きな影響を与えた黒田清輝(1866～1924)も12歳だった明治11年に、短期間だが探月から日本画の初歩を学んだともいう<sup>19</sup>。

また、実際に探月が描いた作品としては、明治20年(1887)に完成した「公事録附図」(宮内庁三の丸尚蔵館)が知られている。これは江戸時代の宮廷行事を記録するため、岩倉具視の下命で作られた儀式書にともなうもので、彩色鮮やかな絵画作品である。一方、「河渡布袋図」(ベルツ・コレクション)は「探月齋守保筆」の署名と「守保」(朱文円印)をもつ作品であり<sup>20</sup>、いかにも狩野派という墨画である。当然ながら「公事録附図」とは全く画風が異なる。

このように探月は経歴を見ても、描いた作品を見ても実に不思議な画家なのである。そして、この探月の名前が慶応4年の如雲社の結成時の記録にあるという新たな事実が出てきた。なぜ探月がここに登場するのか。探月は如雲社の活動にも深く関わっていたのだろうか。謎は更に深まるが、これらは今後の課題としたい。

## 史料編

「今書画及遺墨展観」(山口県立美術館蔵)

### 案文

以廻文得貴意候、然者  
此度森寛齋先子徹山翁  
追福書画会被相催候、就而ハ  
別昏摺出し之表及御披露候、  
尤兩人よ里、御頼被申候へとも、  
猶此段宜敷御承引  
可被下候、為其如此候、頓首

五月 土佐光文

狩野永祥

### 名簿

次第不同  
土佐光武様  
圓山應立様  
岡本亮彦様  
全 元彦様  
塩川文麟様  
全 文鵬様  
鈴木百年様  
全 百仙様  
中嶋有章様  
望月玉泉様  
国井應文様  
原在泉様  
星野蟬水様  
岸竹堂様  
全九岳様  
嶋田雅齋様  
八木奇峯様  
全 雲溪様  
村瀬双石様

全 玉田様  
中嶋華陽様  
岸恭様  
大橋海石様  
徳美友仙様  
岸大路岸禮様  
長野祐親様  
菱田日東様  
大橋文岱様  
吉坂鷹峰様  
田中友美様  
岡嶋清曠様  
前川文嶺様  
吉村孝一様  
山本探齋様  
蒲生旭峯様  
山本桃谷様  
幸野梅嶺様  
石田有年様  
金田昇雲様  
今尾景年様  
桜井百嶺様  
伊澤九皐様  
前川梅谷様  
山田文厚様  
池田雲樵様  
鈴木倉□様  
青竜山様  
林耕雲様  
嶋津松雪様  
宮城晴洲様  
泉文寵様  
木村梁舟様  
本部有数様  
加納黄文様

西村弥兵衛様  
万成堂様  
映玉堂様  
奥村又四良様

## 引き札

来六月一日於圓山正阿弥 不管晴雨  
今書画及遺墨展観 席上揮毫  
先子徹山森守真翁追福

後日附展観録  
明治六年第五月 會主  
寛齋森公肅 「寛齋」(朱文楯円印)

補助 森一道  
森忠次  
平安 後素如雲社 「如雲社」(朱文方印)

書画集所 寺町仏上 西村弥兵衛  
押小シ柳馬バ 万成堂  
堀川四条 映玉堂  
寺町二条 奥村又四良

## 附記

作品調査について、山口県立美術館・荏開津通彦氏のお世話になりました。末筆ですが感謝申し上げます。

## 文献及び註

- (1) 島田康寛『京都の日本画 近代の揺籃』(京都新聞社、1991年)に掲載
- (2) 五十嵐公一「第三回京都博覧会での如雲社」『芸術文化研究』20、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科、2016年
- (3) 『京都博覧会沿革誌』、京都博覧協会、1903年
- (4) 五十嵐公一「第三回京都博覧会での如雲社」『芸術文化研究』20、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科、2016年
- (5) 木村治輔「森寛齋先生行状記」『森寛齋七周年薦事会展観録』、平安後素如雲社、1900年。『円山派と森寛齋—応挙から寛齋へ—』展図録、山口県立美術館、1982年
- (6) 土居次義「森派雑攷」『日本美術工芸』54、日本美術工芸社、1947年。田中敏雄「徹山攷」『古美術』49、三彩社、1975年
- (7) 芳井敬郎「森寛齋の京都生活とその画業」『森寛齋と森派の絵画』展図録、花園大学歴史博物館、2001年
- (8) 五十嵐公一「第三回京都博覧会での如雲社」『芸術文化研究』20、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科、2016年
- (9) 神崎憲一『京都に於ける日本画史』、京都精版印刷社、1929年
- (10) 京都府立総合史料館『京都府百年の史料 八 美術工芸編』、京都府、1974年
- (11) 勝津吉生「円山派と森寛齋—応挙から寛齋へ—」『円山派と森寛齋—応挙から寛齋へ—』展図録、山口県立美術館、1982年
- (12) 後素如雲社から後素協会が分派するのは明治28年である。
- (13) 脇坂淳「京狩野家資料」『大阪市立美術館紀要』9、1989年
- (14) 田中敏雄「扇面散屏風について—京都の狩野派の合同作品—」(『芸術文化研究』19、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科、2015年)が一例
- (15) 岩切信一郎「樋口探月斎守保という画家—依田学海、八田知紀、五姓田芳柳、黒田清輝等との関係をめぐって—」『一寸』36、2008年
- (16) 狩野探淵(1805～53)は、鍛冶橋狩野家狩野探信守道の長男。樋口探月が鍛冶橋狩野家の門人だったことは、「明治維新以来狩野派沿革」(青木茂編『明治日本画史料』、中央公論美術出版、1991年)にも記されている。
- (17) この点については「明治大祀次第手扣及附録」という記録もある。中野慎之「昭和大会屏風の史的位罫」『京都美学美術史学』11、2012年
- (18) 関根金四郎『本朝浮世画人伝』、修学堂、1899年。角田拓朗『五姓田義松史料集』、中央公論美術出版、2015年
- (19) 永田雄次郎・山西健夫『薩摩の絵師たち』、春苑堂出版、1998年。『黒田清輝展』図録、美術出版社、2016年ほか
- (20) 『リンデン美術館蔵 ベルツ・コレクション日本絵画』、講談社、1991年